

# 海に降る雨

蔡雨杉

恋する惑星が自転しながら公転する  
あなたの目から自分を見る  
闇の中で命の鍵を落としたとしても  
前へ進める内が花  
言葉から逃れた蝶々が、あなたの瞼に止める  
どんな欲望もその中につむり  
かえって未知に火をともしのではないか  
魂から零れる動悸に身を委ね、  
無意識の海に降る雨に成りすます  
月光の森を掠めて行く永遠の始まりが、  
一握りの悲しみに話しかけようとしたら、  
まだ名もない涙が鏡に消えてゆく

# じつとそつと

蔡雨杉

恋じつとそつと 昨夜の夢を忍び抜ける

時の流れに選別された自分

貝殻に居候 鸚鵡返し

じつとそつと月の雫 石をうちかち

薄明るく微笑むかたつむり

記憶にすり替えられたシコリ

嘔み付く欲望がさんざん

うじうじもがき夜はまた明けた

じつとそつと うその迷子を無差別退治

ストレス性胃痛を抱えると背が低くなる

ならば、疑い深い朝顔には沈黙

じつとそつと 調律して貰いたい窒息感

ならびに 振り切れない妄想をそらし一心

悪意をろ過する機能の衰退は

退嬰の併合症にご用心

とこどん中毒した場合は

原因不明の言い渡しと天涯孤独の幻覚を処方する

じつとそつと

悪夢を見つつ寝返りを心がける

# そちら、あちら

蔡雨杉

非常な現実が

食料と防御具を慌てて

誰か彼方に行く者に託していく

沈めば沈むほど

ぐっすりした記憶が夢によみがえる

或いは本音を言う練習をしたら

自分の牙を相手の目に発見した

その怒りは すべて of 催促に限界を感じる

無機質に生身の喜怒哀楽を裁断する

時にはゴキブリのように凶々しくなりたい

当たり前のことを

100年早いうちに言ってしまう

屁をこいたように ヒンシユクを買ってから

あちらの店員にも忘れられる

いつもの会合ばかりに

自分の時間を支払っては

お釣りも出ないよ

と注意された

忘れかけた宝物たちが

クールダウンして

残り僅か賞味期限を考える

こちらのワガママを漂泊して

寄木細工を施し

鍋の下敷にする

そちらの期待外れをありがとう  
思い出シーンのバック  
ナンバーの袖を通す  
毎朝の復活劇  
メビウスの輪の足し算よりも  
エンドレスな自惚れから  
抜け出せなく  
階段を踏み外した  
反省不足たち  
スポットライトを浴びる感覚を  
月の裏から  
想像する  
今度はハハと笑いとばして  
はみ出した自尊心を畳んで  
あちらの雨の日にとっておく